倭姫命（やまとひめのみこと）と真名鶴（まなづる） ― 根倉 ―

千何百年も昔のことです。

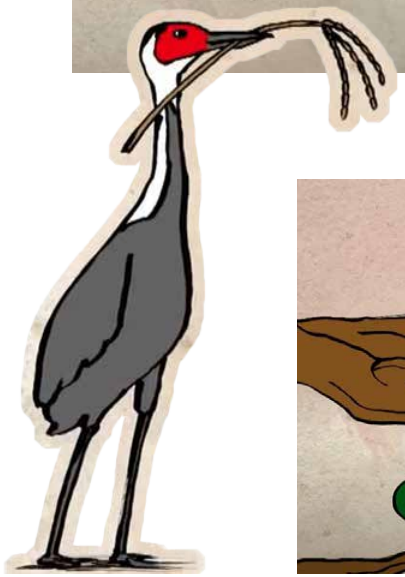
皇女（こうじょ）倭姫命が皇太神宮（こうたいじんぐう）をいただいて、飯野高宮（いいのたかみや）（から磯（いそ）の宮へ向われる時、船で佐々夫江（ささふえ）へお着きになりました。その時、北の方から一羽の真名鶴が飛んできたのでした。

美しい鶴の姿に、倭姫命はしばし見とれていました。

やがて、夜になっても鳴きつづける鶴に、倭姫命は不思議に思われ、鶴の行方をさがしてくるようにと使いの者を出しました。

あちこち鶴の鳴き声をたよりにさがしまわり、佐々夫江の葦原（あしはら）にさしかかると、大きな松の木がありました。

その松の下に八握穂（やつかほ）（一株で八百の穂をつける稲）が生えていて、鶴は八握穂の稲の一本を口にくわえて鳴き止んだのです。



山大淀の田んぼの中に建てられた八握穂神社の石碑

　使いの者は驚いて、そのことを話すと、倭姫命は、
「あの鶴は神の使いだったのですね。」
と大へん喜ばれたのでした。
　そして、その頃このあたりを支配していた豪族、竹連吉比古（たけのむらじよしひこ）らに稲を刈り取らせ、その米で神酒を造って御神前（ごしんぜん）におそなえしたのでした。
　これが神嘗祭（かんなめさい）の初めだといわれています。
　倭姫命は、鶴がいたという葦原に八握穂神社を造り、祀（まつ）ったということです。
そ　のお陰で、今でもこのあたりはおいしいお米がたくさん穫れるのだそうです。
　根倉は、昔、稲倉（いねぐら）と呼ばれていました。

　飯野高宮は松阪市の神山神社、磯の宮は伊勢市の磯神社が推定地となっています。

キーワード：みんわ、根倉、カケチカラ発祥の地、日本遺産

このお話は、昭和56 年に発行された書籍『明和のみんわ』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。